〔改正月令博物筌十二月〕屠蘇方　白朮、桂心、各七分、防風一分、萸、蔞五分、蜀椒、桔梗、各五分、大黄五分、烏頭二分五厘、赤小豆十粒、右の藥を三角の紅の袋に入、除夜に井の底にかけて、元日に取出し、酒につけて呑めば、えきれい其外一切の邪氣をさくる、時珍が曰、蘇は鬼氣の名也、此藥一切の鬼爽を屠割する故に名づくとぞ、

〔月令廣義五正月〕屠蘇酒、〇略中　屠蘇酒方、大黄一錢六分、桔梗去蘆、川椒去核、各一錢五分、白朮、桂心、各一錢八分、烏頭炮去皮臍一錢、吳茱萸一錢二分、防風去蘆一兩、右㕮咀片絳囊盛、懸井中或水缸中、除夕製至元日寅時取出、以無灰酒煎四五沸、取飲自幼及長、

〔公家年事中〕屠蘇　丹家傳云、屠蘇は絳袋に入て、柳枝に付て、除夜の亥時より井戸へ入るゝ、水際一尺ほど上に釣て、地中より升る青陽の氣を藥にうけて、元朝の寅時に、井戸より出して、柳枝につけながら、銚子の酒に浸すなり、紅袋に入るゝ事は、紅は微塵を拂ひ、氣血を補といへり、柳は青陽を司る故に、木の枝に付る也、春は本東方の卯より來るゆゑに、木扁に卯の字を書て柳と訓ずる也、

〔槐記續編〕享保十九年九月九日、夜參候、〇略中　昔ヨリ正月元旦ニ、屠蘇、白散、度嶂散、膏藥ヲ、典藥頭ヨリ獻上ノコト、定メテ古キコトナルベシ、屠蘇ノ方ハ本草綱目ニモ、古書ヲ引テノセタリ、白散、度嶂散、膏藥ノ方ハ、漢ノ書ニテ不見當、如何ノ事ニヤト申上グ、尤近代ノ書ニ、家傳預藥集ト云ヘル俗書アリ、此中ニ不殘ノセタレドモ、其出所モナシ、屠蘇ヤラカ玄朔ヨリ玄治ヘ傳受ノ由ヲノセタリ、慥ナラズ、典藥頭ニ尋タレドモ明ニ云ベカラズ、イカニヤト申上グ、仰ニ此四藥ノコトハ、延喜式、江次第ニ載タリ、古法ト見エタリ、然レドモ何レニモ方ハナシ、藥名ノ數ハノセタリ、但シ一條禪閤ノ江次第ノ抄ニ、醫心方ヲ引テ曰、金谷園記ニ云ト云々、コノ金谷園記ト云モノ、色々御僉議アリケレドモ不知、イヨ〳〵方ハ不分明也、先ハ和方ト究ムベシ、未ダタシカニハアラズ、